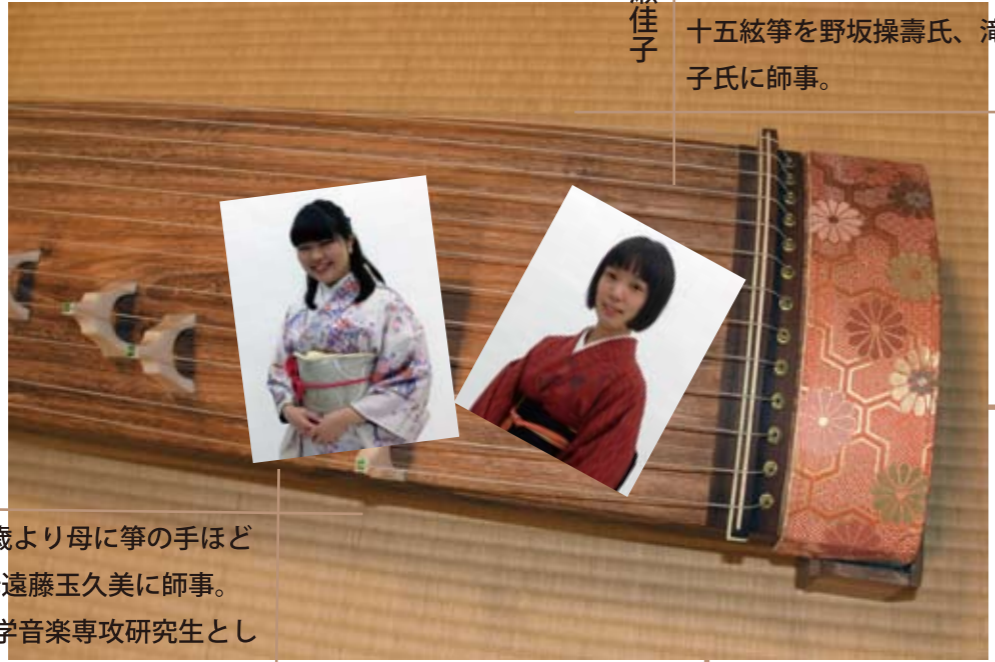


法要後 琴 をきく

双輪 / 小杉太一郎
 六段の調 / 八橋検校
 秋メドレー / 編曲: 木ノ瀬佳子
 OKOTO / 沢井比河流

ぶろふいーむ / 木ノ瀬佳子

福島県郡山市出身。国立音楽大学演奏学科弦管打楽器専修(フルート)卒業。在学中に箏を始める。同大学日本伝統音楽(箏)コース修了。桐朋学園芸術短期大学音楽専攻研究生在籍。箏、十七絃箏、二十五絃箏を野坂操壽氏、滝田美智子氏に師事。



ぶろふいーむ / 遠藤琴音

栃木県宇都宮市出身。6歳より母に箏の手ほどきを受け、15歳より祖母遠藤玉久美に師事。現在桐朋学園芸術短期大学音楽専攻研究生として在籍中。箏、十七絃、二十五絃箏を野坂操壽氏、滝田美智子氏、花岡操聖氏に師事。生田流箏曲玉遠会会員

今回は重要な 編集後記

○この印刷物の他にもう一枚A4版のチラシを同封しました。内容は少し誤解をまねくような、あるいは状況によっては見たくもないし、読みたくもないものかもしれません。テーマは、「松岩寺の本堂で葬儀ができます」。

○先住職の時から、ご希望によっては本堂で葬儀をしてきたので、チラシの表に書いてあることは、それほど新しいことではないはずですが、でも、裏の内容がお叱りをうけるかもしれません。なにしろ、葬儀社を指定して見積金額を載せてしまったのですから。(ご注意!!見積には含むことのできない費用もありますから、よく見て不明な事は各業者へお問い合わせください)。

○「松岩寺はいつから葬儀社とグルになったのか」、なんて思わないでください。寺の本堂での葬儀はどの葬儀社でもできるわけではないからです。たとえば、ご近所の方に「そんな遠くの斎場まで行かなくても、寺の本堂を使って!」と言つと、ご家族はその気になります。でも、葬儀社の中には、なんだかんだと理由をつけて都合の良い会場へ連れて行ってしまふ業者もいます。なぜなのか?。自社のマニュアルには寺の本堂での葬儀の項目がないから、臨機応変に対応できないのです。

○費用だけでなく、心のこもった葬儀をするために作ったチラシです。たとえば、葬儀の返礼があります。この地域のひとつだが、通夜や告別式の際に葬儀社が用意した品物で済ませてしまいます。これは全国共通の風習ではなさそうです。四十九日頃に故人を偲んだ品で、返礼するのが本来です。あるいは、障害者が作業所で作った品物を送るなんて洒落た方法をとれば、まさに追善です。悲しくて動揺している時だからこそ、葬儀社のいいなりにならない葬儀を。そんな思いから作ったチラシです。ご叱正を。(住職記)

不連続シリーズ

見つけた!

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける

こんな時はやってはいけない

SNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス)

SNS とは? =インターネット上で日記やメッセージを通して知人や共通の趣味を持つ人たちとでおたがいにつながること



一昨年の夏でした。長野県上田市にあるソバ屋に立ち寄りしました。美味しいと評判の老舗だから、お昼時になると行列ができてしまう。だから、十一時の開店前から並びました。開店と同時に広くはない店へ入ると、すぐに満席。隣の食卓をみると、女子大生らしいのが3人。彼女らはイタリアン・レストランでパスタをチョイスするのは得意でも、ソバはだめらしい。ガイドブックを取り出しておすすめを調べてからやっと注文。

ほどなくして私にはもりそばの普通盛り。隣の席をちらりと覗くと、天ぷらとざると真田そばが運ばれてきました。ここから、彼女らの食前の儀式がはじまります。スマホでソバの写真を撮りはじめました。それを見ていたお店のおばちゃん。つかつかと近寄ってきて言いました。

「お嬢ちゃんたち、おソバがのびてしまつから、写真を撮るまえに早く食べて!」

彼女らはフェイスブックとかツイッター、LINEで友人たちに今の自分を発信したかったのでしょうか。ソバ屋にとつては迷惑でしょうが、まだそう深刻ではない。でも、人の生死に関わるとなると一大事になってくる。

今年の5月7日付け「読売新聞」の「人生案内」欄にこんな投書が紹介されていました。四十代の主婦・O子さんからです。O子さんの父親が亡くなった日のことです。

「夫と子どもの3人で飛行機を乗り継いで実家に向かいました。空港で、夫はベビーカーを押す私の写真を撮り、悪気もなく、(合掌。義父急逝)とSNSへ投稿したのです」

O子さんは怒ります。

「父を亡くした私の写真を、当日に世界中の友人と共有する気持ちで理解できません」

しかし、O子さんは怒っている自分を見つめて冷静です。「父の死のショックや一人暮らしの母を思う不安を、夫への怒りにすり替えているのかもしれませんが」

便利な道具が普及しはじめた時に、誰もが経験しそうな落とし穴です。ならば、どうすればいいか。江戸時代の禅僧、道鏡慧端(とうきやうゑたん) (一六四二〜一七二二) の遺偈(ゆいげ)です。

「坐して死す / 末期の一句 / 死は急にして道い難し / 無言の言を言とす / 道わじ道わじ」

死はどんな言葉でも言い表せないから何もいわない、と。いうのです。音も絵も瞬時に世界の果てまで伝えられる現代、わざわざ薬味にしたソバのように味わいたい言葉です。